習近平はなぜ、独裁体制を確立できたのか？「腐敗撲滅運動」に隠された野望

2/22(火) 11:57 配信 41

Voice

習近平が推し進めた「腐敗撲滅運動」は、本気で腐敗を撲滅するための運動ではなかった。政敵たちを排除していくための武器にすぎず、共産党幹部に「絶対服従」を強いる脅しとして見事に機能した。

習近平が推し進めた「腐敗撲滅運動」は、本気で腐敗を撲滅するための運動ではなかった。それはあくまでも、政敵たちを排除していくための武器にすぎなかった。それは同時に共産党幹部に「絶対服従」を強いる脅しとしても見事に機能したのである。

※本稿は、石平著『新中国史　王の時代、皇帝の時代』(PHP研究所)を一部抜粋・編集したものです。

もし「2期10年」のルール通り展開していれば

胡錦濤が党の総書記を務めた10年間、中国共産党の指導体制は文字通りの集団的指導体制となった。総書記の胡錦濤はいわば最高指導部の首班として全体の統括と調整の役割を果たしていたが、独断専行で物事を決めるようなことはほとんどなかったし、それほどの力も度胸もなかった。

その一方、胡錦濤は政治局常務委員の各メンバーに担当する方面の仕事を全面的に任せきる形で政治を行なっていた。たとえば、経済の運営は国務院総理の温家宝に全面的に任せきり、治安と国内統制は、警察・司法など「政法担当」の政治局常務委員である周永康という人物に全権を委ねていた。

このようにして、胡錦濤政権時代の10年間においては、トウ小平が皇帝政治に終止符を打つために確立した指導者定年制と集団的指導体制がほぼ完全な形で実行されていて、中国共産党政権内の不動のルールとして確立できたようにも見えた。

もし胡錦濤政権以後の共産党指導者と指導部が、胡錦濤の時と同じようにこの2つのルールをきちんと守り、共産党の政治がその後いくつかの「2期10年」のルール通りに展開されていれば、ひょっとしたら新しい政治ルールとして確立した定年制と集団的指導体制のもと、中国という国の政治は長年の「皇帝政治」の伝統に別れを告げ、本当の意味での近代化を始め

ることができたのかもしれない。

そのなかで共産党の政治は依然として独裁であっても、個人独裁による皇帝政治の伝統は、この中国の地において終焉していたかもしれない。

習近平個人独裁体制の確立

しかし中国にとっては不幸なことに、2012年11月に開かれた共産党第18回党大会において、トウ小平によってスタートされた「皇帝政治脱出」のプロセスは中断され、「皇帝政治」への復帰が再び始まった。まさにこの党大会において、胡錦濤の後継者として習近平という人物が登場し、共産党政権の最高指導者となったからである。

習近平は、毛沢東・トウ小平と同世代の革命古参幹部を父親にもつ「太子党派幹部」の1人である。「太子党」と近い江沢民一派の後押しがあって胡錦濤の後釜に据えることとなった。

しかし政権を握ったその日から、彼は胡錦濤政権時代までの集団的指導体制と一線を画し、自らの個人独裁体制の確立を目指した。

そのために政権が成立してから1期目の5年間、習近平は毛沢東流の粛清政治を行なって党内の反対勢力を一掃し、自らの権力基盤を強固なものにした。その時、彼が政敵の粛清に使った最大の武器はすなわち「腐敗撲滅運動」の展開である。

次ページは：全面開花した「腐敗文化」

前へ 1 2 3 次へ

1 / 3ページ

習近平はなぜ、独裁体制を確立できたのか？「腐敗撲滅運動」に隠された野望

2/22(火) 11:57 配信 41

Voice

全面開花した「腐敗文化」

毛沢東の時代以来、「腐敗」というのはもともと天下国家を私物化した共産党政権の一種の文化である。前述のように、毛沢東本人は腐敗した貪欲な生活を送るだけでなく、詐欺師のような手段で莫大な蓄財にも走っていた。

そして毛沢東の後のトウ小平時代においては、市場経済の広がりと経済繁栄のなかで、共産党の「腐敗文化」が全面開花した。とくに胡錦濤政権時代の後期においては、共産党幹部であれば腐敗に手を出していない人間がほとんどいないほど、汚職や収賄などの腐敗がまさに政権内の「普遍的な文化」として隆盛を極めた。

ところが習近平政権になってから、「腐敗の普遍化」ともいうべきこのような現象は習近平自身にとってむしろ、粛清を行なって自らの権力基盤を固めるための好機となった。

共産党総書記に就任して早々、習近平は唯一の政治的盟友である王岐山（おう きざん）という共産党の大幹部を、腐敗摘発専門機関の中央規律検査委員会の書記に就任させた。

それ以来5年間、この習近平・王岐山コンビは二人三脚で、中共政権内における凄まじい「腐敗撲滅運動」を展開した。2012秋から2017年秋までの5年間、総計25万人以上の共産党幹部が腐敗の摘発を受けて失脚したり、刑務所入りになったりした。

最初から「選別的な摘発」だった

もちろん習近平と王岐山が進めた腐敗摘発は、本気で腐敗を撲滅するための運動では決してない。それはあくまでも、習近平が党内の政敵たちを潰すための権力闘争の武器であって、共産党幹部集団全員に脅しをかけて習近平への絶対服従を強いるための手段にすぎなかった。

習近平たちの腐敗摘発は、最初から「選別的な摘発」であった。習近平・王岐山身辺の腐敗や彼らの子分たちの腐敗はいっさい不問にして、摘発の矛先をもっぱら政治上の対立勢力に向けていたのである。

この手段を用いて習近平は、江沢民派の勢力をバックにして自分に盾付く元共産党政治局常

務委員・警察ボスの周永康（しょう　えいこう）や、解放軍元制服組トップの郭伯雄（かくはくゆう）などを腐敗摘発で粛清し、それを機に警察と軍を掌握した。

腐敗摘発で政敵を粛清する一方、習近平・王岐山コンビはまた、この腐敗摘発を用いて恐怖政治を行ない、共産党幹部全員を怯えさせて彼らをねじ伏せた。

前述のように、共産党幹部はほぼ全員が腐敗に手を出しているから、摘発の手が及んできたら誰も破滅から逃れられない。そこで習近平と王岐山は、前述の「選別的な腐敗摘発」をもって幹部たちに1つの明確なメッセージを送った。「習総書記に不服な奴は漏れなく摘発して破滅させてやるが、習総書記に絶対服従していれば目を瞑ってやるぞ」とのメッセージである。

腐敗にたっぷりと浸かった共産党幹部の大多数は、いっせいに習近平の足下に平伏して習近平への絶対服従を誓うこととなった。そしてその結果、習近平の個人独裁体制はわずか5年間で出来上がり、強固なものとなった。

次ページは：精神上の支配においても「教祖様」に

前へ 1 2 3 次へ

2 / 3ページ

習近平はなぜ、独裁体制を確立できたのか？「腐敗撲滅運動」に隠された野望

2/22(火) 11:57 配信 41

Voice

精神上の支配においても「教祖様」に

こうしたなかで2017年10月、共産党第19回党大会が開催されたが、この大会は結局、習近平の個人独裁体制を確立するための重要会議となった。

まず、この党大会では党の規約が改定され、習近平の名前を冠とする「習近平思想」なるものが新しい規約に盛り込まれて、マルクス主義や毛沢東思想と並べて中共政権の指導的思想理念として掲げられた。

これで習近平は、たんなる政治上の独裁者として政権に君臨するのではなく、思想上・精神上の支配においても共産党の「教祖様」となった。その一方、党の最高指導部である共産党政治局は習近平派によって固められることとなった。

19回党大会閉幕の翌日、共産党中央委員会の第19期1中全会が開催され、党中央政治局員のメンバーが選出された。新しい政治局のメンバー25人のうち、新任されたのは15人であるが、そのうち、いわゆる習近平の子分、中国語でいう「習家軍」は私が数えたところでは9人であり、その多くがかつての部下・幼馴染み・同級生で占められていた。

その結果、25名からなる政治局には、留任の習近平派を含めて習の子分・お友だちが12名となっている。それに対して、共産党前総書記の胡錦濤が率いる胡錦濤派（すなわち共産主義青年団派）は3名、他の10名はいずれも派閥色のない一匹狼のような存在で、何の政治勢力も成していない。

四人組どころではなく「十一人組」

このように、習近平派は政治局において圧倒的な勢力をもつ派閥となっており、共産党政治局はある意味で、習近平の側近や取り巻きによって乗っ取られている状況といえる。独裁体制の中国共産党の歴史上においても、それはまさに前代未聞の異常事態なのである。

党中央政治局における習近平派が12人も占めるような状況は、じつは現代中国の「初代皇帝」であり、絶対的個人支配を誇った毛沢東の時代ですらなかった。毛沢東時代の大半を通して、党主席の毛沢東自身は絶大な権威と権力を持ちながらも、党内の力関係においてはライバル派閥の劉少奇派や周恩来派がおり、毛沢東の権力をつねに牽制している状況であっ

た。

中央指導部が毛沢東派一辺倒となったのは、1966年からの文化大革命で劉少奇一派が一掃されたあとである。当時、共産党政治局には毛沢東の妻や側近である江青、張春橋（ちょうしゅんきょう）、王洪文、姚文元（よう　ぶんげん）が入り、毛沢東の側近政治を支える「四人組」を形成していた。

しかし今、政治局のなかの習近平派は四人組どころではなく、「九人組」あるいは習近平を除いた「十一人組」となっているのである。しかも実績があって昇進したのではなく、習近平の友人や子分だから抜擢されたことは明らかだ。今の習近平はかつての毛沢東以上の側近政治をほしいままに行ない、中国共産党は半ば「習近平の党」となっている有様である。

本書が刊行された2022年はちょうど、辛亥革命による清王朝皇帝退位から110周年の節目の年である。しかしよく考えてみれば、この110年にわたる中国の近現代史はしょせん、毛沢東や習近平のような「新皇帝」を生み出す歴史にすぎない。

この110年間、中国の経済・文化・社会などでは大きな変貌が起きているものの、政治の根本は一向に変わらない。秦の始皇帝以来の皇帝政治は依然として中国という国を支配しており、中国という国は、旧態依然の「皇帝の時代」からどうしても脱出できないままである。

石平（評論家）

前へ 1 2 3 次へ
3 / 3ページ

46 76 23
学びがある わかりやすい 新しい視点

【関連記事】
「侵略的な覇権主義路線」に走り出した習近平…政権3期目が最も危険なワケ（石平）
「皇帝政治」が災いの始まりだった？わずか15年で秦を滅亡させた始皇帝の誤算（石平）
「台湾問題」は国際課題…習近平の野望をなんとしても抑制させる意義（石平＆掛谷英紀）
「キン肉マンも規制？」習近平独裁体制でいよいよ中国がヤバくなる3つの理由（渡邉哲也）
習近平の「暗殺未遂数」は歴代トップクラス（福島香織）

最終更新: 2/22(火) 11:57
PHPオンライン衆知（Voice）